

## 基本情報技術者 らくらく突破CASLII



八鍬幸信 著  
技術評論社  
2010.2

本書は、国家試験「基本情報技術者試験」で出題される仮想アセンブリ言語CASLIIの受験参考書として編まれたものです。本書は、もともと平成元年に刊行された「CASLの完全解析」を前身として、何度かの改訂を重ねながら今日に至っているものです。本書は、アセンブリ言語についての詳細な解説本と問題集としての性格を兼ね備えたものです。また、アセンブリ言語やコンピュータに関する知識や学習経験のない読者であっても、自学自習で読み進められるように工夫がなされています。

20年以上にわたって命脈を保つことができたというのは、考えてみると、驚異的にも思えます。もちろん、この間、いろいろな、いわゆるプログラミング言語が現れては消え、現れては消えてきました。このような、生者必滅の厳しい情報技術革新の流れに即応して、この間、「基本情報技術者試験」で課すプログラミング言語も入れ替えが図られてきました。こんな中、アセンブリ言語が課題言語として生き永らえているのは、それなりの理由があるからです。

アセンブリ言語を学習すると、プログラミングを通じて、コンピュータを“動かしている”あるいは“コンピュータを支配している”という実感を会得することができます。何故かと言うと、この言語の命令それぞれが、機械（ハードウェア）としてのコンピュータの要素的動作と一対一に対応しているからです。また、アセンブリ言語を学習すると、他の高級（人間の言語・記号表現に近い）言語によるプログラミングで応用可能な、ワクワクするテクニックを身につけることができます。

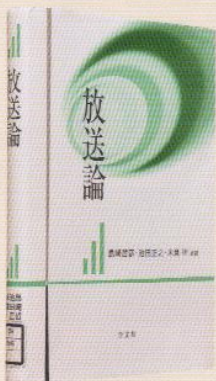
アセンブリ言語は、情報処理のプロフェッショナルを志す場合にはもちろんのこと、今日の情報社会あるいはデジタル社会の本質を、表層あるいは感覚レベルにおいてではなく、深層において感得するための必須の知的道具と言えます。

アセンブリ言語を単なる狭小な一情報技術と見るのではなく、デジタル社会のコア技術と捉えて、その習得に挑戦されることをお勧めします。本書がその一助となることを切に望みます。

第2開架閲覧室 [007.6 || Y16]

八鍬幸信(経営学部教授)

## 放送論



島崎哲彦  
池田正之 編著  
米倉 律  
学文社  
2009.4

放送って何?と聞くとたいの学生はぐっと詰まる。しばらくして、「テレビ」、「ラジオ」、「電波」、「バラエティ」などの単語が口から出てくる。テレビは空気のようにあるのが当たり前で考える対象でずらなかつたのかもしれない。

しかし、テレビは「今」を瞬時に映像とともに伝える最大のジャーナリズム母体である。また身近な娯楽提供者として社会に大きな影響力を持つ。さらに1975年以降、新聞をはるかに引き離し最大の広告媒体の地位を保っている。一方で、NHKは政治との距離がしばしば問われ、民放も営利主義等の結果として“俗悪”や“やらせ”という批判を浴びてきた。さらに、国が進めるデジタル化への投資負担、インターネットに至る多メディア化の中での相

対的地位の低下、放送と通信の融合など、様々な問題・課題を抱えている。

この本は放送のメディア特性と社会的機能、放送史、法制度、産業構造、放送ジャーナリズム、娯楽番組、広告、公共放送の役割、地域メディアとしての放送、番組制作と放送倫理、放送と市民、海外の放送事情、そして放送の課題と展望に至る13の章を設け、放送の全体像を示すよう努めた。1925年に日本でラジオ放送が始まって以来、今日に至る放送の流れと広がりをつかむために、ぜひ、読んでほしいと思う。

第2開架閲覧室 [359 || Sh45]

池田正之(文化学部准教授)